

『吾輩は猫である』音楽

Junko Higasa 2016.6.19

第十章で、猫の吾輩の鳴き声がベートーヴェンのシンフォニーに比較されるが、続く第十一章のエンディングには西洋音楽の色が見える。

まず吾輩の死を暗示させるところで名前が上がるカーテル・ムルを主人公にした『牡猫ムルの人生観』の作者：エルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマンは法律家であると同時に音楽家でもある。本名のウィルヘルムをアマデウスに変えて名乗るほどモーツァルトが大好きであった。漱石は猫の死亡通知を出したが、ホフマンも飼い猫ムル(1821.11.29没)の死亡通知を出している。

次に吾輩の絶命の状況に重ねられるのは、トーマス・グレイが親友ウォルポールの飼い猫に捧げた追悼抒情詩「Ode on the Death of a Favourite Cat, Drowned in a Tub of Gold Fishes」(金魚水槽で溺れた愛しの猫への鎮魂歌)であるが、グレイはハーブシコード(チェンバロ)を演奏した。

最後にヴァイオリンを弾く寒月君のモデル寺田寅彦は、音響研究を生涯のテーマとし、独学でヴァイオリンを演奏した。

そして本作はレクイエムである。『猫』中篇自序に、倫敦通信の追加を望んだ正岡子規の手紙を引用した漱石は、最終章でその名を挙げた。「始終無線電話で肝胆相照らしていた」はずの親友に応えられなかった慙愧の念を無線で飛ばしながら書いた作品である。